



Circumportal pancreas — a hazardous anomaly in pancreatic surgery —

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2018-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木内, 亮太 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3351

論文審査の結果の要旨

門脈輪状膵は膵鉤状突起部と膵体部が癒合し、膵実質が門脈を全周に取り囲む解剖学的破格であり、十二指腸乳頭部周囲がんに対して行われる膵頭十二指腸切除術において手術手技の変更の原因となる。申請者は膵頭十二指腸切除術患者の手術記録および術中写真を後方視的に検討し、門脈輪状膵の発生頻度、CT 画像による診断精度および術後膵液瘻との関連性を評価した。

対象は、2002 年から 2012 年の間に静岡県立静岡がんセンター肝胆膵外科で膵頭十二指腸切除術を施行した 552 例である。門脈輪状膵が確認されたのは 7 例 (1.3%) であった。診断を伏せて行った CT 画像の読影ではこの 7 例を含む 8 例で門脈輪状膵と診断され、CT 画像による門脈輪状膵診断の感度および特異度は、それぞれ 100% および 99.8% となった。臨床上問題とされるグレード B、C の術後膵液瘻は門脈輪状膵のない症例で 545 例中 173 例 (31.7%) に発生しているのに対し、門脈輪状膵症例では 7 例中 5 例 (71.4%) に発生し、門脈輪状膵症例で有意に頻度が高かった。多変量解析でも門脈輪状膵が術後膵液瘻に関与する因子の一つとして検出された。

門脈輪状膵は稀な解剖学的破格であるが、膵頭十二指腸切除術に当たって注意すべき破格である。本研究は手術記録および術中写真から門脈輪状膵の頻度を明らかにした初めての報告であり、CT 検査がその診断に有用であること、門脈輪状膵症例では膵頭十二指腸切除術後の膵液瘻の頻度が高いことを示した点を高く評価した。

以上により、本論文は博士 (医学) の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 阪原 晴海

副査 椎谷 紀彦

副査 杉本 健